

# 英語教育における小中連携のイメージ共有化支援

研究組織：地域連携事業代表者及び事業推進協力者

所属・職・氏名：宇都宮大学教育学部

宇都宮市教育委員会学校教育課

那須烏山市教育委員会学校教育課

那須町教育委員会学校教育課

教授 渡辺 浩行

指導主事 川島 聡史

指導主事 藤田 繁

指導主事 内村 壮一

## はじめに

まず、本事業の実施にあたり、ご支援ご協力をいただいた方々に心からお礼申し上げたい。本事業の目的が、十分とは言えないまでもかなり達成できたのは、以下に示すように、すでに各地域との連携を継続的に行ってきたことによるものである。

### ・宇都宮市

会話科 清原北小学校 平成18年度～  
文科省研究指定校 新田小学校 平成19年度～  
宇都宮市小中一貫教育カリキュラム開発

平成21年度～

### ・那須烏山市

英語コミュニケーション科

平成20年度～

### ・那須町

小学校外国語活動研修

平成20年度～

また平成14年度以来、栃木県や県内各地での数々の研修・研究に関わり、長期にわたる実質的な地域連携に関わってきたことも、本事業の支えとなっている。あらためて関係各位に感謝の意を表する次第である。

## 目次

### I. 事業計画

I-1. 事業概要－目的と事業内容

I-2. 実施時期・方法

I-3. 自治体と大学の役割

### II. 事業実施概要

II-1. 実施できたこと

II-2. 実施できなかったこと

III. まとめ－成果と課題

IV. その他

## I. 事業計画

### I-1. 事業概要

#### 【目的】

地域における小中連携活動（英語教育）を大学が実践的に支援する。その支援を通して、自治体、大学での教員研修（小中英語教育とその連携）を構築し、大学における教員養成（小中一貫・連携の英語教育）に還元する。

#### 【事業内容】

自治体における小中連携活動の現状を把握し、それを大学が分析し、分析結果をもとに小中連携のモデル研修プログラムとイメージ共有化DVDを作成する。そのプログラムとDVDを使って大学で研修を実施し、両者を改定して自治体に配布する。

### I-2. 実施時期・方法

①平成23年6～9月

自治体での調査、授業録画

②平成23年10月

大学での調査結果・録画授業分析

③平成23年11月

大学でのモデル研修プログラム・イメージ共有化DVD作成

④平成23年12～平成24年2月

大学でモデル研修プログラム・イメージ共有化DVDを使った研修実施、自治体へモデル研修プログラム・イメージ共有化DVDを配布

### I-3. 自治体と大学の役割

#### 【自治体側の役割】

- ①小中英語教育連携の現状把握（進捗状況・問題点・研修計画） →大学へ
- ②小学校外国語活動、中学校英語授業のビデオ録画収録 →大学へ

#### 【大学側の役割】

- ③小中英語教育連携のモデル研修プログラム作成
- ④研修プログラムの核となるイメージ共有化の英語活動・授業のDVD作成
- ⑤大学における上記プログラム・DVDを活用した研修の実施 ←自治体から参加
- ⑥プログラム・DVD改訂版作成・配布 →自治体へ

## II. 事業実施概要

ここでは、前記の「I. 実施計画」にもとづいて、実際に「実施できたこと」「(十分に)実施できなかったこと」の大きく2つに分けて報告する。

### II-1. 実施できたこと

次の3点に要約できる。

- ①現状把握・分析
- ②モデル研修プログラム作成
- ③イメージ共有化DVD作成
- ④研修・養成（授業）

#### II-1-① 現状把握・分析

このことについては栃木県内でも、渡辺がすでにある程度おこなってきたことではあるが、今回、連携地域3地区の現状・分析から、あらためてそれが再確認されることとなった。

#### A. 小中連携に要する授業連携

「英語教育における小中連携」での一番の課題は「授業そのものでの連携がなされていない」ということである。これまで、カリキュラム、教材・教具、また指導者交流等による小中連携は多少なされてきたが、授業そのものによる連携は図られてこなかった。

授業での小中連携とは、新学習指導要領が示す「小学校での素地」「中学校での基礎」が授業に着実に反映され、小中の授業に自然につながり

が生まれるということである。このことは、新学習指導要領でも次のようにうたわれている。

①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、
②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、
③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養う。 (小学校)
④聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。 (中学校)

表1. 新学習指導要領（外国語（英語）教育）

注意したいのは、①～④がブロックのように積み上げられて「素地・基礎」が養われるのではないということである。下図が示すように、小中連携において、②⇔④の事項は相互補完の関係にあり、中学校でも②③を継続することが必要不可欠となる。

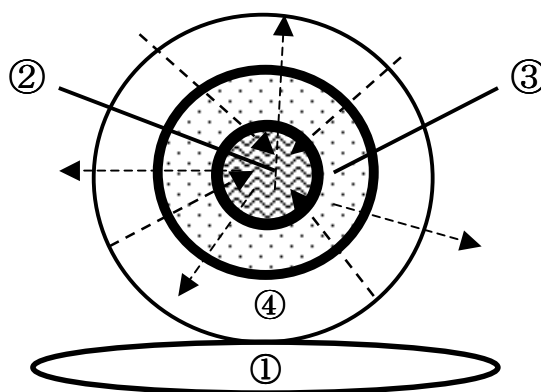


図. 新指導要領の小中連携のとらえ方

しかしながら、ブロック積立の考え方は、カリキュラム、指導内容・方法、教材、授業展開、評価等の中に根深く入り、小中連携の大きな障害となっている。加えて、「素地と基礎がつながる小中連携の授業」の大きな妨げの原因として次の2点が指摘できる。

#### B. 小中連携における中学校側の問題

これまでの中学英語授業は「素地」作りに十分に取り組んでこなかった（これなかった）。当然、「素地」を踏まえない「基礎」作りにも大きな問題があったのだが、授業はそれなりに行われてきた。それは後述する「素地・基礎育成の5つの要素」が欠ける授業であった。

### C. 小中連携における小学校側の課題

小学校外国語活動では、小学校教師に次の3点(注1)が不足しているにもかかわらず、準備期間のないまま、「素地」作りを任せられることとなっている。

1. 英語力(に自信)がない
2. 指導力(に自信)がない
3. 準備の時間がない

その結果、あるいはその上に、小学校教師自身が中学生のときに受けた英語授業のイメージで活動を展開してしまう。もしくはTTと称してALT、ボランティア、地域支援員に任せきりになってしまう。

以上の現状把握・分析をしっかりと認識した上で、研修あるいは養成でなければ、現状の問題・課題解決につながる研修・養成内容は期待できない。小中の教員には、是非とも「小中連携のイメージ共有化」を促す研修が必要なのである。

### II-1-② モデル研修プログラム作成

モデル研修プログラムは、手短に言えば、「素地と基礎がつながる小中連携の授業」を小中の教師が共に実践する(できるようになる)研修プログラムということになる。以下、ここでは紙幅の都合上、研修の骨子を示すことにする。

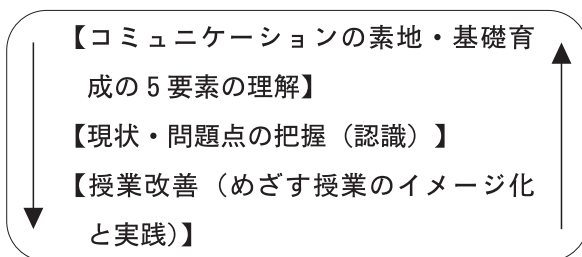


表2. モデル研修プログラムの骨子

表2が示すように、まず「コミュニケーションの素地・基礎育成の5要素」を十分に理解する必要がある。また、それが一旦理解できたとしても、すでにある英語授業のイメージがその「理解の定着」「理解にもとづいた実践」の絶えざる障害となる。「コミュニケーションの素地・基礎育成の5要素」の理解、認識は、それがしかるべき行動(授業実践)に必ず結びつくものでなければならない。

### 【コミュニケーションの素地・基礎育成の5要素】

- ①多量のインプット+少量のアウトプット
- ②インプットの3要素
  - a. 理解できる(理解しやすい)
  - b. 学習者の指向性(興味関心・知識経験)に沿う
  - c. 反応したくなる
- ③音声重視(の継続)
- ④音声重視をから文字への段階を踏んだ丁寧な移行
- ⑤インタラクション(D-I-R-F構造)によるインプットとアウトプット(注2)

この5つの要素は現状・問題点の把握(認識)にも必要不可欠な視点となっている。

### 【現状・問題点の把握(認識)】

上記の5要素がこれまでの中学校英語授業に欠けていたにもかかわらず、「コミュニケーションの基礎作り」という名の授業がなされてきた。また、結果的には、それが小学校外国語活動における「コミュニケーションの素地作り」にも悪影響を及ぼしてきたことになる。

以下はその現状・問題点である。

- ①少量のインプット+少量のアウトプット  
(アウトプットのための同じインプットの繰り返し)
- ②インプットの3要素の欠落
  - a. 理解できない(理解する必要がない)
  - b. 学習者の指向性に合わない
  - c. 反応したくならない  
(強制されるアウトプットのためのインプット)
- ③音声軽視(の継続)(文字偏重の継続)
- ④音声軽視から文字への無理で急激な移行
- ⑤インタラクション(I-R-F-D構造)をとも伴わない型にはまったアウトプットの繰り返し

この他にも、「意味を伴わないアウトプット」「文脈のないアウトプット」「理解をチェックするためのアウトプット」「評価のためのアウトプットとインプット」などの問題もある。

いずれにしても、現状・問題点の把握(認識)を、誰よりも教師自らが行き、それを踏まえて自分自身の授業改善を図ることが強く求められる。

そして、それを小中の教師が共有しなければならない。

#### 【授業改善（めざす授業のイメージ化と実践）】

これまで見てきたように、小中連携では、小学校教師だけでなく、中学校教師も授業改善を図ってこそ「素地・基礎の育成」が実現できる。決して、一方が他方に何かを要求するというものではない。ましてや、「現状・問題点」をそのままにしての、特に、中学校から小学校への要求ということになれば、永遠に小中連携は実現できない。そうならないために、【「コミュニケーションの素地・基礎育成の5要素」の理解】を徹底し、【現状・問題点の把握（認識）】を、最終的には教師個人の深い内省のもとに行わなければならない。研修が悉皆・自主・地域・校内・個人のどの形を取ろうと、教師個人における深い内省が【授業改善】の鍵となる。

その内省の大きな手助けとなるのが、活動の良し悪しが一目瞭然でわかる授業録画ビデオの視聴である。「素地・基礎の5要素」のある活動とない活動を、例えば、同一教師・児童生徒によるビデオクリップで示すことで、歴然とした違いがわかり、その比較は大きな説得力を持つことになる。つまり、「めざすべき授業」「小中連携の素地・基礎育成の5要素を取り込んだ活動」をビデオクリップで視聴し、自分の実践と比べることで、教師は授業改善を具体的に継続的に図れるわけである。

以上がモデル研修プログラムの骨子である。

### Ⅱ-1-③ イメージ共有化DVD作成

モデル研修プログラムの中心となるのが「イメージ共有化DVD」で、本事業では「小中連携英語活動DVD」と「TT（チームティーチング）活動DVD」の2種類を作成した。以下が各DVDの内容（概略）になる。

#### 【小中連携英語活動DVD】

小学校 18ビデオクリップ

中学校 25ビデオクリップ

#### 【TT（チームティーチング）活動DVD】

悪い例 3ビデオクリップ

良い例 15ビデオクリップ

「小中連携英語活動DVD」では、「素地・基礎育成の5要素」を多く有した英語活動を編集した。また、その要素がない場合、少ない場合の授業も視聴できるようにしてある。編集したビデオクリップは小学校を対象にしたものが18、中学校は25になる。

「TT活動DVD」では、チームティーチングの悪い例として3つの活動を示し、良い例として15の活動を編集している。ソロ（教師一人）の授業同様、TTでも、小中連携の「素地・基礎育成の5要素」は欠かせない。とりわけ、チームティーチングでは、⑤「インタラクション（D-I-R-F構造）によるインプットとアウトプット」の要素を一層重視しなければならない。この点を配慮して編集している。

しかしながら、この2つのDVD作成にあたっては次の困難点があった。

- ・肖像権、個人情報守秘の問題があり授業録画が容易にできない。
- ・「素地・基礎の5要素」を押さえた活動が小学校外国語活動、中学校英語授業ではまだ少なく、該当する活動がなかなか見つけられず、収録できない。
- ・特に、④「音声重視から文字への段階を踏んだ丁寧な移行」の活動については、その収録はほとんどできなかった。

以上のことについては、後述の「Ⅱ-2.（十分）実施できなかつたと」でも再度触れることになる。

### Ⅱ-1-④ 研修・養成（授業）

モデル研究プログラム作成、イメージ共有化DVD作成と並行して、23年度は次の研修・養成（授業）を実施することができた。

#### ①宇都宮大学小学校外国語セミナー

と き：平成23年8月22日(月)

ところ：宇都宮大学共通教育D棟4階1446教室

参加者：小中教員約35名

内 容：歌、カード活用、インタラクション活動、文字指導等

## ②宇大小中連携英語セミナー

「英語のインプットの大切さとその効果的、魅力的な手法」

と き：平成23年12月17日(土)

ところ：宇都宮大学教育学部マルチメディア  
教室1

参加者：約70名（小中教員、指導主事、学生）

内 容：効果的インプットについての講話とワーク  
ショップ

## ③宇都宮市連携月例英語活動セミナー

と き：平成23年6月～平成24年2月（計8回）

ところ：宇都宮大学教育学部A棟2203教室

参加者：約15名

内 容：録画した活動視聴による授業分析・検討

## ④那須烏山市英語コミュニケーション科研修

と き：那須烏山市立烏山小学校

ところ：平成23年7月6日、10月3日、  
10月14日、11月7日

参加者：10～30名

内 容：授業参観、検討会

## ⑤那須町

と き：那須町役場

ところ：平成23年12月16日、平成24年1月16日

参加者：約30名

内 容：録画授業視聴、意見交換、講話

## ⑥小学校外国語活動の理論と実践（集中授業）

と き：8月20日(土)～23日(火)

ところ：宇都宮大学共通教育D棟4階

参加者：宇大学生約25名、小中教員数名

内 容：インプット、インタラクション、カード活用、文字指導、ワークショップ、  
模擬授業

以上の研修・養成（授業）では、「モデル研修プログラム」「イメージ共有化DVD」の作成段階にあったものを部分的に活用することになった。

## II-2.（十分に）実施できなかったこと

（十分に）実施できなかったこととして、以下の3点があげられる。

### ①イメージ共有化DVD用の授業録画

繰り返しになるが、肖像権や個人情報守秘の問

題があり、授業録画の許可がなかなか得られなかった。さらに日程調整も思うようにできなかったこともあったが、小中連携のイメージ共有化に適した内容の授業を短期間で見つけるのは困難であった。

そのため、主として、いままで撮りためてきた録画授業の中から、適切と思われる活動や場面を多く編集する結果になってしまった。

### ②モデル研修プログラム・イメージ共有化DVDを活用した研修の実施

「モデル研修プログラム」の基本はある程度できてはいたものの、「イメージ共有化DVD」の本格的な作成は、上記①の理由により、予定より3ヶ月近く遅れた。したがって、両者を揃えての本格的研修は実施には至らなかった。

### ③イメージ共有化DVDの配布

同じく、DVD作成が遅れたこと、そしてそれ以上に肖像権、個人情報守秘の問題があり、せっかく作成したDVDではあるが、これを年度内に配布することはできていない。

この3点について、今後どう取り組むかは次の「III. 成果と課題」で述べることにする。

## III. まとめ—成果と課題

本事業の成果をまとめると次のようになる。

### 【成 果】

①現状把握・分析はかなりできた。

②それにもとづいてのモデル研修プログラム作成も標準的なものを完成させることができた。

③モデル研修プログラムの核となる小中連携イメージ共有化DVD作成において、合計で61の活動（ビデオクリップ）を編集することができた。

④作成段階ではあったが、モデル研修プログラムと小中連携イメージ共有化DVDは、当該連携地域の研修や大学での研修・養成（授業）においても活用することができた。また、県内外の他地域の研修において有効利用することになった。

総じて、本事業は大学と自治体（2市、1町）の連携事業として一定の成果を上げたものと自己評価している。今後、この連携がさらに継続し発展していくよう努めたい。それをめざして以下の

課題に取り組み、より現実的で地域（差）に応じた支援ができるように工夫を重ねていく所存である。

【課題】

- ①作成した「モデル研修カリキュラム」「小中連携のイメージ共有化DVD」を本格的に活用し、その有効性をチェックし、今後、その精度を高める必要がある。また、標準的なものから、各地域の実態・実情に合わせてカスタマイズして利用できるようにしていきたい。
- ②DVD作成の授業録画にあたっては、肖像権や個人情報守秘の問題が絶えず関わってくるので、常日頃から授業録画ができる地域、学校との関係作り図らなければならない。
- ③附属小中学校が地域連携事業に果たす役割の可能性は大きい。附属と大学との連携を地域と大学の連携と結びつけた事業やプロジェクトを計画し、実施することが望まれる。
- ④本事業は、科研費「小学校英語教育に関わる指導者研修モデル・指導者養成カリキュラム」（課題番号：20520545）（代表者）及び科研費「児童・生徒の意識調査と言語習得研究の観点による小中連携の授業」（課題番号：22520634）（分担者）の研究と関連した内容である。本事業の成果を両科研費の報告書の中に関連事項として盛り込み、学会でも発表したい。

IV. その他（予算執行の内訳）

大学側（16万円）

イメージ共有化DVD(マスター)作成費	
小中連携活動DVD	10万円
TT活動DVD	4万円
謝金(資料まとめ)	約1.5万円
諸雑費	約0.5万円

地域側（3万円）

研修・検討会に関わる資料・旅費	3万円
-----------------	-----

注

- 1. 栃木県教育委員会の委託により、宇都宮大学において平成17年度～19年度にわたり「小学校英語活動推進者養成研修」を開催した。その後

も毎年度、同様の研修を県総合教育センター講師として担当し、アンケート調査等で多くの教師の実情を把握してきた。

- 2. 教師と児童生徒とのやりとり（インタラクション）の中で、英語のインプットとアウトプットがなされることになる。そこには、まず教師側からの「働きかけ：イニシエーション（Initiation）」があり、次にそれに対する児童生徒の「反応：レスポンス（Response）」があって、それに教師がさらにどう「対応：フォローアップ（Follow-up）」するかというIRFの3つの要素がある。そのフォローアップが対話をさらに促す（Discoursal）なもの（D-IRF構造）であることが、インプットとアウトプットを継続する鍵となっている。

参考文献

アレン玉井光江（2010）.  
『小学校英語の教育法』 大修館書店

岡秀夫・金森強（2007）.  
『小学校英語教育の進め方』 成美堂

久埜百合・粕谷恭子・岩橋加代子（2008）.  
『こどもとともに歩む英語教育』 ぼーぐなん

白井恭弘（2008）.  
『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』 岩波新書

—————（2012）.  
『英語教師のための第二言語習得論入門』 大修館書店

松川禮子・大下邦幸（2007）.  
「小学校英語と中学校英語を結ぶ」 高陵社書店

Cullen, R. (2002).  
Supportive teacher talk: the importance of the F-move. *ELT Journal* 56/2:117-26.

Taylor, L. & Fu, S. (2006)  
ASPECTS OF TEACHERS' FEEDBACK ON STUDENTS' CONTRIBUTIONS IN CLASS. *IATEFL RESEARCH SIG NEWSLETTER* Issue 18 August 2006.